

私が中部電力に勤務する父の転勤で、平岡小学校から、この智里西小学校に転校して来てから、もう六年経ちます。転校して来た時はまだ五年生でした。Y・Oさんは私の家の前を通って学校に通うせいにか、すぐお友だちになりました。

その頃から、Yさんは、学校へ行く朝は、いつも私の愛称「Tさん」を、大きな声で呼んでくれました。私もその声に家を出て一緒に仲良く登校したものでした。

中学になりました。私たちの地区は山の中で生徒数が少ないので、小中併設でした。小学校には分校があって、中学になると、その人たちが入って来ました。H・Sさん、C・Hさん、T・Hさんの三人でした。この新しい三人のお友だちと一緒にYさんは、毎朝私を呼んでくれました。

「Tさん、Tさん、とんぼ。」

と大きな声で呼んでくれ、五人で揃って学校に通ったものでした。

あともう一年で、卒業したらあある、こうするといっていたのですが、おそろしい梅雨前線豪雨で、あの六月二十七日夜に、Yさんは、たった一人であの永遠の旅に立ってしまったのです。

あの日、凄いい雨で、昼食を食べながら、担任のK先生が、

「Oさんの家は危いよ。」といわれるのに、

「私の家は危いの。」と隣の人に話しかけていました。

午後になって、私たちは先生方に付き添われて、部落ごとに、緊急集団下校しました。横川川はもうあふれ、Yさんは出迎えのお父さんに背負われて川を渡っていきました。

その夕方、Yさんは崩落する土砂のため、倒潰する家の下敷きになって死んでしまったのでした。

翌日、殆どの同級生が、K先生も、私の家の前に集まったのですが、橋は流れ、道は崩れ、洞は抜け、どうしてもYさんの亡くなった所には寄りつけませんでした。

「Y・Oさんが死んだ」——でも、それはまるで夢のようで、とても信じられませんでした。

七月四日、やっと道や橋が何とか復旧されて学校が始まりました。それから毎日、私はYさんの「Tさん」という声を待っていました。しかしその声は聞こえませんでした。何故Yさんは呼んでくれないんだろうと思つて、よく考えてみると、ああ、Yさんはもうこの世にはいなかったのです。それからの私は毎朝一人で学校に通いました。聞きなれた声を耳にしないと何だかとても淋しいものでした。

もう二度と帰らぬYさん。どうか天国で安らかにお眠り下さい。私の良き友であったあなた——Y・Oさん。いつまでも私の良き友でいて欲しい。

(三十八年)